

洋画家小間嘉幸と そのシルクロード作品について

竹田多麻子*

はじめに

小間嘉幸氏（1929～2012）は1970年代から約30年にわたりシルクロードを旅して、その土地の風景や人々の姿を描いてきた洋画家である。横浜ユーラシア文化館では2019年から2020年にかけて小間氏の油絵作品とスケッチブックをご遺族から寄贈頂いた。これを受けて、当館では2020年10月3日～12月27日に企画展「杏咲く頃—絵筆と歩いたシルクロード 小間嘉幸絵画展」を開催し、主な油絵作品23点とスケッチに収録されている水彩作品などを展示したほか、絵のモチーフに関わる考古、美術、民族資料なども併せて紹介した。展示のアンケート結果では、「作品に感動した」「画家自身に興味を持った」などの感想が寄せられたため、本稿では、展示や図録で十分に紹介できなかった小間氏の経歴⁽¹⁾、シルクロードへの取材旅行、画風の特徴、資料的な価値を取り上げ、紹介する。

なお、本文中では人名の敬称を省略させて頂いた。

1 小間嘉幸について

小間嘉幸は、1929年群馬県富岡市大島にて父 小間吉也と母 ひでとの三男として生まれた。小間家は先祖代々からの大地主で、吉也は婿養子として稼業を継いだ。戦後の農地改革により田畑を失い、残った山林を管理し、林業や養蚕業等に従事していたという。イギリスから自転車や洋犬を輸入するぐらいハイカラな人物であったようだ。それだけ経済的に余裕があったのだろう。

中学校時代から美術部に属していた小間には、高校卒業後は美大に進学し絵の道を極めたいという夢

があったが父の反対にあい、群馬県立富岡高等学校を卒業後いったん税務署に就職。それでもなお画家になる夢を捨てられず、翌年単身上京し、多摩美術大学を受験する。合格し、油絵学科に入学、1952年に卒業する。卒業後は美術の教員となり、府中市と国立市等の中学校に勤めながら、絵画の制作活動を継続した。大学卒業後は、一年目に光風会で初入選し、その後、日展や白日展でも多数の入選を果たす。1975年には白日展文部大臣賞を受賞し、国内の画壇で活躍した。国内だけでなく海外の題材を扱うようになったのは、小間が43歳（1972年）の時になる。シルクロード旅行での取材を重ねて、作品制作を行っていった。50歳を期に、画業に専念するため教師の職を辞し、それ以降、個展やグループ展を精力的に行った。2012年に東京にて逝去。

小間の絵に対する関心は、絵をたしなむ祖父 嘉平の影響があったようだ。また、子供時代に家の襖全てを取り替えることになり、一人の画家を自宅に住まわせて襖絵を描かせたことがあったそうだ。後年、小間はそれを眺めていた自身を含む兄妹たち皆がその絵が仕上がっていく様子に感動した、と語っている。このような日常的に絵画に触れる環境にいたことが、小間を絵の道に進ませたのだろう。この環境は、他の兄妹にも影響を与えた。2歳年下の弟である小間政男（1931～2017）は、彼も兄と同じ大学で油絵を学び、東京の中学校の教員をしながら制作活動を行った洋画家である。また、四女の栄子も油絵を描き、小間、政男、栄子の3人が共に日展に所属していたという。

(1) 小間の画歴や受賞歴などについては、図録『杏咲く頃—絵筆と歩いたシルクロード 小間嘉幸絵画展』（横浜ユーラシア文化館、2020年）を参照されたい。

*TAKEDA Tamako 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

2 寄贈作品

当館に寄贈された作品はシルクロードに関わる油絵が73点、スケッチブック29点である。小間の寄贈への意志は、シルクロード関係の作品は美術鑑賞はもちろんの事、博物館でシルクロードの歴史や文化を紹介する時などに活用してほしいというものであった。実際に、今回の展示では、作品のモチーフに関わる考古・美術・民族資料を合わせて展示したが、大変好評であった。

縁あって寄贈のお話を頂き、2012年から受入調査を始めた頃に小間が逝去、その後ご遺族との調整や手続きを経て、2019年に油絵作品、2020年にスケッチブックが収蔵された。

日本を題材にしたものも含め、小間の作品は、当館以外に、彼の故郷である富岡市立美術博物館、日本外務省、日本赤十字社（日赤美術コレクション）、駐日アルメニア共和国大使館、駐日パキスタン大使館、群馬県立富岡高等学校、寸又峡温泉翠紅苑などに収蔵されている。大使館に寄贈したのは、描いた風景をその国の大使館へ贈りたいという強い思いがあったからである。当館としては、現在、情勢の安定していない国々の作品を主に受け入れることになった。

油絵作品は、シルクロードの壮大な自然、遺跡や建造物、遊牧民などの現地で暮らす人々の姿が描かれている。描かれた場所は、作品タイトル、風景・建物・民族衣装、スケッチブックのデッサン、文献⁽²⁾などを参照して同定した。その結果、アフガニスタン34点、ウズベキスタン11点、中国6点、シリアとイランが各4点、トルコ3点、ロシア2点、レバノン、パキスタン、ヨルダンが各1点、不明が6点である（56-57頁の油絵作品リスト）。その中でも遊牧民の姿をモチーフにしたものは12点になる。アフガニスタン遊牧民の季節の移動やラクダに乗って進む男性が繰り返し描かれている。アフガニスタンの作品が多いのは、小間のアフガニスタンへの思いがそれだけ強かったのである。晩年、何度も語っ

ていたのが、訪れた国の中でアフガニスタンが一番気に入っていること、特に遊牧民の姿に魅かれ、死ぬ前に再訪したいという願いの言葉であった。府中市に眠る墓の墓石には、ラクダに乗ったアフガニスタンの遊牧民男性のモチーフ（No.2）が刻まれている。

スケッチブックは29点で、取材旅行に小間が携えていたものである。1993、98年時のものは含まれていない。スケッチブックに描かれているのは、遺跡や自然の風景はもとより人々の何気ない動作、動物の様子などで、一瞬にとらえて形にしている。特に、1998年のシリア旅行では、小間の長女で、日本画家の小間典子がアレppo博物館で遺物模写の絵師として働いていた関係で現地での長期滞在が可能となり、スケッチには遺跡や遺物、農作業の様子や現地の伝統的な家屋など実生活の様子が収められている。

人物のデッサンには、モデルの名前が英語やアラビア語でつけられていたり、風景のデッサンには細かく色の指定が描き込まれたりしている。スケッチブックの枚数が少なくなっているものがあるが、恐らく、描いた絵をだれかにあげたか、何かしら必要に迫られてページを破ったのだろう。また、鉛筆デッサンのほかにサインペンを使って一筆書きで描いたり、墨で輪郭をとり、その中を水彩絵具や色鉛筆で塗ったりしている。1回の旅行でスケッチブックは最低3冊用意し、そのほかに、絵画用道具は小さめのキャンバス、スケッチブック、イーゼル、油絵具、水彩絵具、水彩色鉛筆、墨、サインペンなどを持参していた。

3 シルクロード旅行

小間は1972年から1998年までシルクロードの各地を巡っている（表1）。シルクロードに興味をもつきっかけが何であったのかは不明であるが、初めての取材旅行は1972年である。この時の旅行は、昭和を代表する俳人加藤楸邨とその門弟たちが旧ソ

(2) 参考文献については図録『杏咲く頃』を参照されたい。

表1 取材旅行先

年	年齢	訪問国
1972(昭和47)年 夏	43歳	ソ連邦(シベリア、ウズベキスタン)
1973(昭和48)年 春	44歳	アフガニスタン、ソ連邦(ウズベキスタン)
1975(昭和50)年	46歳	レバノン、ギリシャ、イラク、トルコ
1976(昭和51)年 秋	47歳	アフガニスタン、イラン
1979(昭和54)年 秋	50歳	中国・新疆ウイグル自治区
1984(昭和59)年 夏	55歳	中国・新疆ウイグル自治区
1989(平成元)年	60歳	シリア、ヨルダン
1991(平成3)年 春	62歳	中国、パキスタン(中パ公路)
1992(平成4)年 春	63歳	シリア
1993(平成5)年	64歳	イタリア
1995(平成7)年	66歳	トルコ東部
1996(平成8)年	67歳	中国、パキスタン、レバノン
1998(平成10)年	69歳	イラン、トルクメニスタン、ウズベキスタン

連邦を巡り、日本の俳句の可能性を海外で見出すというものであった。小間はその旅行に同行したのである。小間と加藤楸邨の関係は、小間の妻 さち子が女学校時代から加藤の門弟であったことから知り合った縁である。旅行の翌年、加藤は旅行時に詠んだ俳句と記録を『死の塔』⁽³⁾と題して出版するが、その挿絵に、訪問地で目にした建物、遺跡、人々を薄墨を使い軽いタッチで描いた小間のイラストが使われている。また、加藤が創刊した『寒雷』の表紙絵とカット絵を1973年から1993年まで担当した⁽⁴⁾。日本の風景や静物画の表紙絵が多い中、シルクロード作品が表紙となったのは6点で、そのうちの2点は当館で収蔵している(No.51、66)。

取材先を見ると、旧ソ連時代のウズベキスタン、1972年の日中国交正常化によって日本人の個人旅行が可能となった中国、1979年のソ連による侵攻以前のアフガニスタンを訪ねている。また、1979年以降、アフガニスタンへの入国が難しくなると、取材先をアフガンより先のシリア、レバノンなど西アジアへ変更している。小間の取材先がその時代の世界情勢に影響されていることがわかる。

今回、ご遺族から旅程を記録した資料の画像を提供頂いた。資料は、大学ノートに「シルクロードの旅 記録」というタイトルをつけた旅の記録で、1972年から1979年までの5回分の旅程が収められていた。旅行ごとに日時、都市、交通機関、現地時刻、摘要という項目で記録をし、摘要にはその時の行動だけでなく、感想や印象も加えている。また、旅行のパンフレットや地図なども貼り付けられ、地図には、その地点の通過時間や「羊」「雨で山見えず」という状況のメモも記されている。

参考として、取材旅行の5回分の旅程(主な都市)をここに紹介したい。

第1次 1972年7月28日～8月11日 *俳人 加藤楸邨による俳句旅行に同行。

東京→ハバロフスク→イルクーツク→アルマータ→タシケント→サマルカンド→ブハラ→タシケント→ハバロフスク→ナトホカ→横浜

第2次 1973年3月28日～4月21日

東京→ハバロフスク→イルクーツク→タシケント

(3) 加藤楸邨『死の塔 西域俳句紀行』毎日新聞社、1973年。

(4) 1994年以降、表紙絵等は小間典子が担当。『寒雷』は2018年に廃刊となったが、後継誌として『暖響』が刊行され、引き続き表紙絵を担当している。

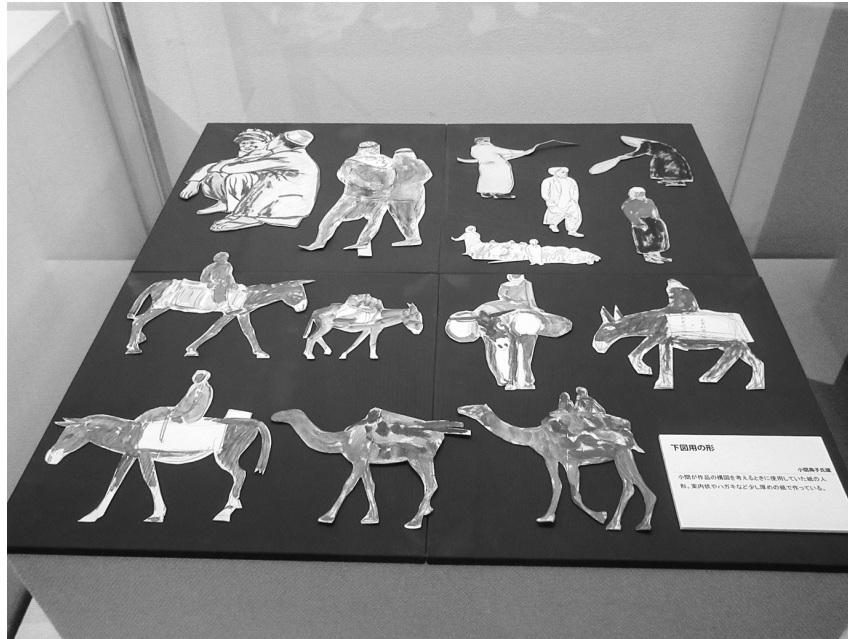


写真1 紙製の人形

→サマルカンド→ブハラ→タシケント→カーブル
→バーミヤン→プリクムリ→マザリシャリフ→ヘ
ラート→プスト→カンダハール→ガズニ→ペシャ
ワール→ラワルビンディ→タキシラ→カラチ→モ
ヘンジョダロ→カラチ→東京

第3次 1975年3月18日～4月4日

東京→バンコク→デリー→ベイルート→バール
ベック→バグダッド→アテネ→イスタンブール→
イズミール→エフェソス→イスタンブール→カイ
セリ→テヘラン→イスファハーン→ベルセポリス
→シラーズ→テヘラン→ベイルート→デリー→バ
ンコク→マニラ→東京

第4次 1976年9月27日～10月13日

東京→香港→バンコク→デリー→カーブル→バー
ミヤン→プリクムリ→マザリシャリフ→ヘラート
→メシェド→ニシャープール→ゴルガン→テヘ
ラン→ボンベイ→バンコク→香港→東京

第5次 1979年11月15日～11月30日

東京→上海→蘭州→烏魯木齊→トルファン→烏魯
木齊→石河子→烏魯木齊→蘭州→北京→成田

今後、第6次以降の旅行についても記録が見つかる
れば、場所の同定や作品の理解につながるであろう。

3 画風の特徴

画風は、自身が出会った風景などを写生的な表現
を使いつつ力強いタッチと鮮やかな色で描き出して
いるが、見る者に印象を与えるような工夫が随所に
施されている。

それは、特にアフガニスタンの作品で「動」を意
識していることである。作品 No.1 (口絵2)、2、4、
5、13、32などは、人や動物が正面から描かれて
いるので、まるで見ている自分のほうに迫ってくる
かのような動きを感じさせる。また、よく見られる
のが、キャンバス内にモチーフを収めるのではな
く、途中で切ってしまう手法である (No.1、2、4、
5、9、11、17、32)。例えば、No.24 (口絵2) の
作品は、連なって歩く最後の人物が途中で欠けてい
る。この構図が、あたかもアニメか動画の一瞬の映



写真2 アフガニスタンの遊牧民
1970年代 田島勝義撮影



写真3 ラクダの装飾品（拡大）
1970年代 田島勝義撮影

像を見ている気分にさせるのである。小間は構図にはこだわりをもって、人物をどこに配置するかは手製の紙人形を使って検討していたという。展示では、実際に小間が使用していた人形を展示した(写真1)。人形は、使用済みのハガキや案内状の裏に絵のモチーフを描き、それを切り抜いたものである。使いこんだ跡が残り、人形からは小間が何度も構図を練り直していた様うかがえる。

No.2の右側の男性とNo.13の男性はほぼ同じ姿であるが、気に入ったモチーフは繰り返し使うことが多い。また、隅のほうに人間、動物を小さく描くことで、自然や建造物の壮大さを表現している(No.66、68)。

4 作品の資料的価値

小間の作品の資料的な価値とはどのようなものだろうか。筆者は二つあると考えている。一つは、作品がその国の当時の様子を知るための資料となることである。作品No.1、2、13のアフガニスタン遊牧民のラクダの装飾品に注目すると、房のついた赤い太い紐がラクダの顔に飾りとして巻きつけられ、轡となっている。ちょうど1970年代に撮影された遊牧民の移動の写真からほぼ同じ装飾をしたラクダを見ることができる(写真2、3)。また、No.2のロバの背を覆っているものは、地域は異なるが、このような鞍袋(写真4)である。



写真4 鞍袋 イラン
20世紀 当館蔵

人が身に着けている衣装も、西洋化の服装が主流となっている現代ではどんどんと失われているため、当時の服装を知る手がかりになる。このような作品の中から民族的、文化的情報が得られることは、特にアフガニスタンのような情報が少ない地域については大変意義深いことと考える。ただし、作品内容とタイトルとなっている場所が一致しているかどうかは、十分な検証をすることが必要である。

もう一つは、作品が過去を知る記録となっていることである。バーミヤン大仏やパルミラ遺跡のような現在失われてしまった遺跡(No.14、68)や、ダム建設によって沈められたシリアのテル・アバル遺跡の風景、遊牧民の日常生活といったシリア一連の

様子、レバノンの爆破前の市街地の様子などが描かれたスケッチブックがある。当時の小間は自分の関心の赴くままに描いていたであろうが、その姿が見られない今となっては作品が貴重な資料となっている。

おわりに

シルクロードを描いた画家は、平山郁夫をはじめ洋画家及び日本画家問わずあまた存在する。2005年6月号の『月刊美術』では「遙かなるシルクロード」という特集で、代表的な日本の画家たちが「シルクロード」という道のりに何を感じ、それをどのように描いたのかが紹介されている⁽⁵⁾。シルクロードを仏教の道へのあこがれや「平和の道」としてとらえる者、人々の表情の美しさに魅かれる者がいれば、シルクロードの幻想的な風景や悠久の歴史を表現したいという者もあり、その感じ方や描く動機は画家それぞれであった。小間の作品からは画家のシルクロードへの情熱とそこに暮らす人々への温かいまなざしが感じられるが、そのモチーフは、美しい自然や有名な遺跡だけでなくおしゃべりをしている女性の姿（No.48）、街角（No.15）、町の裏通り（No.43）など、なぜここを描いたのかと思う作品もある。そこに小間のシルクロードに対する思いがあるようだ。「クセルクセスの門」（No.51）が表紙となった俳誌『寒雷』400号の「表紙のことば」⁽⁶⁾として小間はこのような記している。「私は旅をするといつも昔を思う。現在は石油王国のイランであるが、古い歴史をもつ遺跡はもとより道々のオアシスの人々や土屋を見ても、古い時代の人々の心に触れたような感慨をおぼえるのであった。」今、目にするものから昔のシルクロードの面影を感じ取っていた。この感覚が、作品制作の源流となっていたのだと思われる。

本稿では、作品を寄贈頂いてから現在までに調査できた範囲の事柄を報告した。小間は取材旅行中に描くだけでなく、作品の基となる写真を多く撮影

しているという。今後、それらの写真資料も使いながら調査を進め、作品の描かれた場所や民族的、文化的な情報をさらに明らかにしていきたい。

謝辞

本稿執筆に際しては、小間典子氏から小間嘉幸氏の経歴と作品に関する多くの情報と資料をご提供いただきました。作品の描かれた場所の同定については、古代オリエント博物館研究員の下釜和也氏、アフガニスタン研究者の関根正男氏、ウズベキスタン大使館文化部のシロジュ・アズィーゾフ氏、孫崎紀子氏にご教示を頂きました。また、アフガニスタン遊牧民の写真は関根氏をご提供くださいました。ここに記して感謝申し上げます。

(5) 月刊美術編集部「特集 日中国交正常化が開いた秘境への扉」『月刊美術』357号、2005年6月、50-53頁。

(6) 寒雷発行所『寒雷』400号記念誌、1976年、2頁。

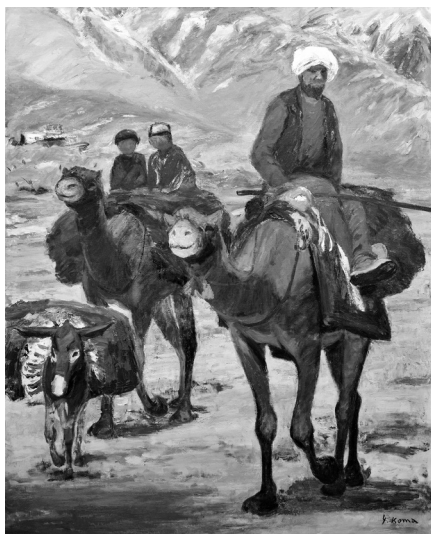
小間嘉幸油絵作品リスト

No.	作品名	制作年	描かれた国・都市または地域	モチーフ（場所など）	号数	備考
1*	草原の旅（口絵2）	1986年	アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	第18回日展 （1986年）出品
2*	杏咲く頃	1985年	アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	第17回日展 （1985年）出品
3	遊牧		アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	
4*	ガズニへの旅		アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	
5*	ガズニへ帰る	1988年	アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	第20回日展 （1988年）出品
6*	ベドウィンの女達	1989年	シリア	遊牧民のテントの前にたつ女性	F100	第21回日展 （1989年）出品
7*	黄河	1986年	中国		F100	第62回白日展 （1986年）出品
8	マザリシャリフの廟		アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟	F100	
9*	マザリシャリフ巡礼	1980年	アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟	F100	
10	羊飼たち		アフガニスタン？		F100	
11*	ハンティング・ヴァレーに行く	1984年	アフガニスタン	遊牧民の移動 「ハンティング・ヴァレー」の 場所は同定できず。	F100	第16回日展 （1984年）出品
12	ガズニへの旅		アフガニスタン	遊牧民の移動	F120	
13*	砂漠の旅		アフガニスタン	遊牧民の移動	F120	
14*	パルミラ	（1990年代）	シリア・パルミラ	パルミラ遺跡 パルミラシャミン神殿	F120	
15*	アブンババイヤ広場		ウズベキスタン・タシケント旧市街	アブンババイエフ広場 現在のチョルスーホテルのあたり	F60	
16	アブンババイヤ	1975年	ウズベキスタン・タシケント旧市街	アブンババイエフ広場 現在のチョルスーホテルのあたり	F80	第51回白日展 （1975年）出品 No.15の左半分を描いている。
17*	ガズニへの旅		アフガニスタン	遊牧民の移動	F80	
18	ニシャプール		イラン・ニシャプール		F80	
19*	ジェラーシュの遺跡	1993年	ヨルダン・ジェラーシュ	ジェラシュ遺跡	F130	第69回白日展 （1993年）出品
20*	遺跡守	1994年	不明		F80	第70回白日展 （1994年）出品
21	シャリー・コシャックの城塞		アフガニスタン・バーミヤン	シャリー・コシャック	F60	
22	ブルーモスクの男		アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟か	F50	
23*	カブールへの旅		アフガニスタン		F50	
24*	マザリシャリフの巡礼（口絵2）	（1980年代）	アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟	F50	
25	五泉山		中国・甘肅省・蘭州		F30	
26	ニシャプール		イラン・ニシャプール		P40	
27*	莫高窟		中国・新疆ウイグル自治区	ベセクリク千洞仏	F40	
28	ブルーモスク巡礼		アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟	M40	
29	羊飼		不明		F30	
30	埋葬		アフガニスタン		F30	
31*	マザリシャリフの楽師		アフガニスタン・マザリシャリフ	楽器は、ルバープというアフガニスタン源流の伝統楽器	F30	
32*	砂漠の民		アフガニスタン	遊牧民の移動	F40	
33	遺跡に立つ		アフガニスタン・カーブル	シェール・ダルワーザ	F20	
34	アレppo城		シリア・アレppo	アレppo城	F20	
35	遺跡守		不明		P20	
36	ユルギップの穴居 ーカッパドキアー		トルコ・カッパドキア	ユルギュッブ	F12	
37	ニシャプール		イラン・ニシャプール		F8	
38*	ススト		パキスタン・シュスト		F8	
39	ギョレメの岩窟寺院		トルコ・カッパドキア	ギョレメ	F10	
40	火焰山とラクダ		中国 新疆ウイグル自治区		P10	
41	ヤワーシュ		トルコ	「ヤワーシュ」の場所は同定できず	P10	
42	イルクーツクの教会		ロシア・イルクールク	スバスカヤ教会か	F10	
43*	サマルカンド裏通り		ウズベキスタン・サマルカンド		F8	
44	サマルカンドへの道 ータシケントー		ウズベキスタン・タシケント		F8	

No.	作品名	制作年	描かれた国・都市または地域	モチーフ（場所など）	号数	備考
45	ビビハヌイムを遠望		ウズベキスタン・サマルカンド		F8	
46*	無題		ウズベキスタン・タシケント	タシケントのバザール風景	F8	
47	サマルカンド		ウズベキスタン・サマルカンド		F8	
48*	カブールの女達		アフガニスタン・カーブル		F6	
49	天祝		中国 甘肅省、チベット族自治権		F6	
50	アフガニスタンの男		アフガニスタン		F6	
51*	クセルクセスの門		イラン	ペルセポリス	P8	俳誌『寒雷』創刊400号記念誌（1976年）の表紙。
52	キャラバン		アフガニスタン	遊牧民の移動	F8	
53	水を運ぶ少年		不明		F6	
54	街の楽師		アフガニスタン・マザリシャリフ		F6	
55	無題		アフガニスタン		M40	
56	アフガニスタンの人々		アフガニスタン・マザリシャリフ		F20	キャンバス裏に「九耀展」と貼り紙あり。
57	クセルクセス門		イラン	ペルセポリス	F20	
58	バーミヤン		アフガニスタン・バーミヤン	シャリー・ゴルゴラ	P20	
59	サマルカンドの丘		ウズベキスタン・サマルカンド		F20	
60	白い家		ウズベキスタン・ブハラ		F15	
61	無題		不明		F15	
62	無題		シリア		F15	
63	シャジョーイにて		アフガニスタン	「シャジョーイ」の場所は同定できず	F12	
64	アブンババイヤ		ウズベキスタン・タシケント旧市街	アブンババイヤ広場	F12	No.69の右半分の風景を描いている。
65	カブールの女達		アフガニスタン・カーブル		F12	
66*	火焰山		中国・新疆ウイグル自治区		P10	俳誌『寒雷』創刊500号記念誌（1985年）の表紙
67	カブールへの旅		アフガニスタン		F10	
68*	バーミヤン石仏		アフガニスタン・バーミヤン		F10	
69	アブンババイヤ広場		ウズベキスタン・タシケント旧市街	アブンババイエフ広場 現在のチョルスーホテルのあたり	P20	
70	パールベック		レバノン・パールベック		F10	
71	城塞の丘一殺しの部落		アフガニスタン		F10	
72	イルクーツク		ロシア・イルクーツク	スバスカヤ教会	F8	
73	ベドウィンの女達		アフガニスタン・マザリシャリフ		F15	

- ・制作年の括弧内は推定年代
- ・作品番号の*は作品の画像あり

小間嘉幸の油絵作品



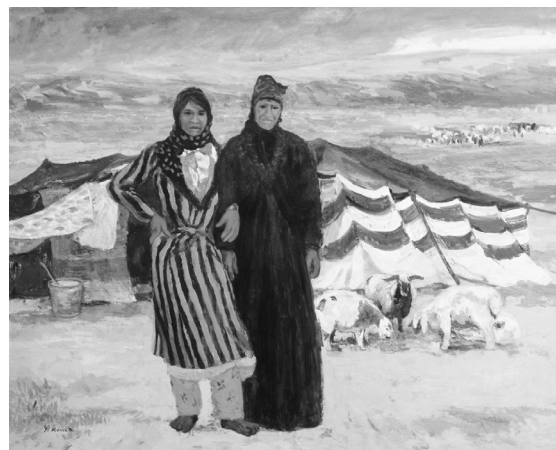
No.2 杏咲く頃 1985年



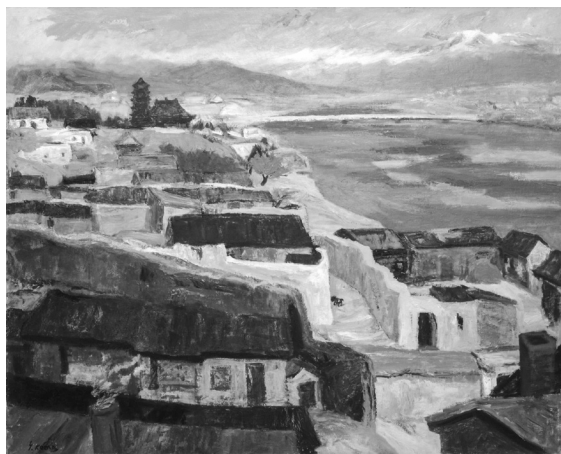
No.4 ガズニへの旅



No.5 ガズニへ帰る 1988年



No.6 ベドウィンの女達 1989年



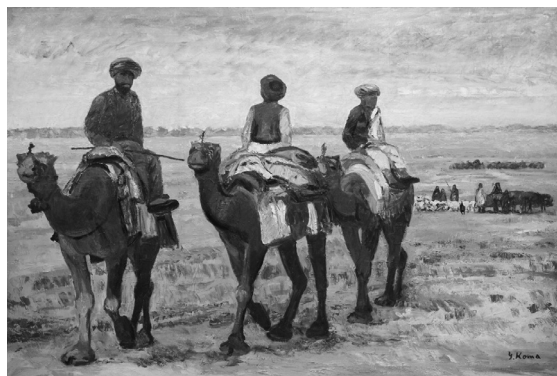
No.7 黄河 1986年



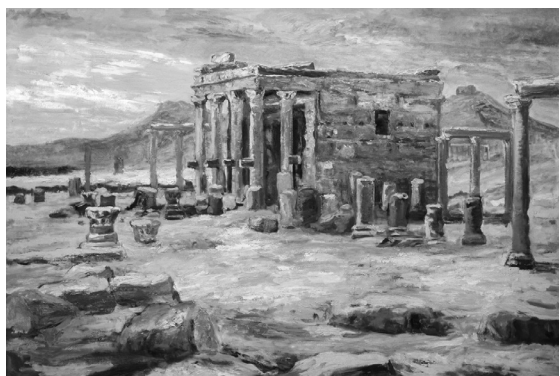
No.9 マザリシャリフ巡礼 1980年



No.11 ハンティング・ヴァレーを行く 1980 年



No.13 砂漠の旅



No.14 パルミラ (1990 年代)



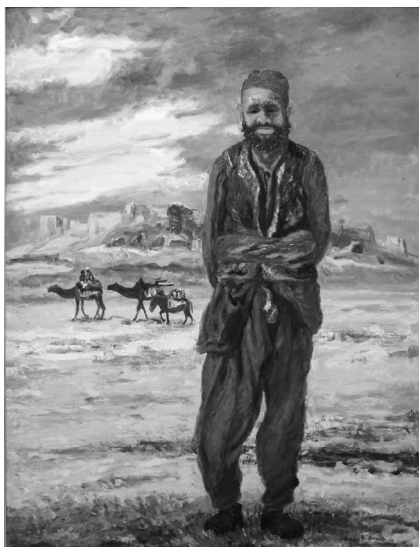
No.15 アブンババイヤ広場



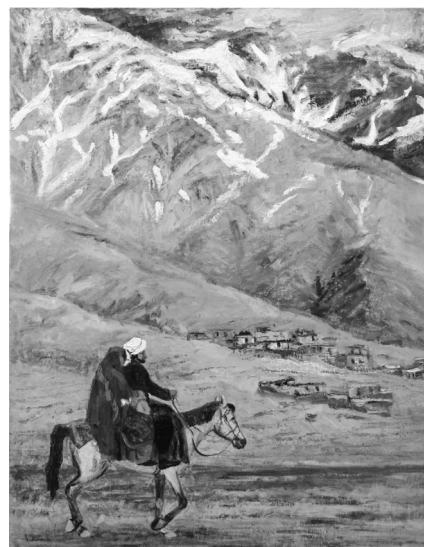
No.17 ガズニへの旅



No.19 ジェラーシュの遺跡 1993 年



No.20 遺跡守 1994 年



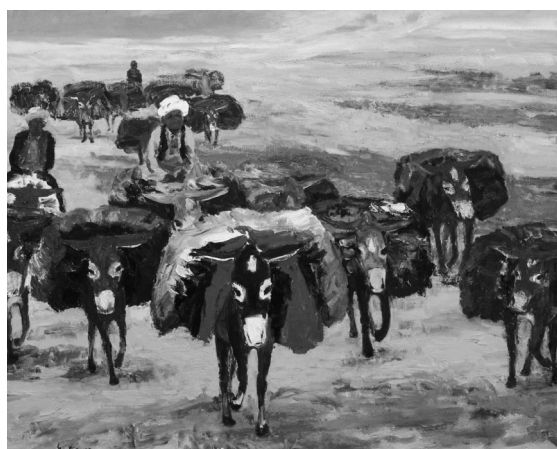
No.23 カブールへの旅



No.27 莫高窟



No.31 マザリシャリフの楽師



No.32 沙漠の民



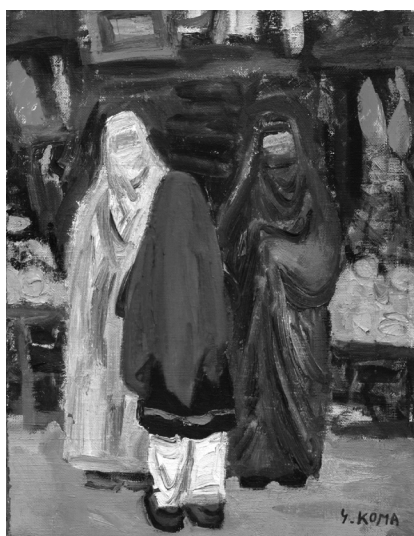
No.38 ススト



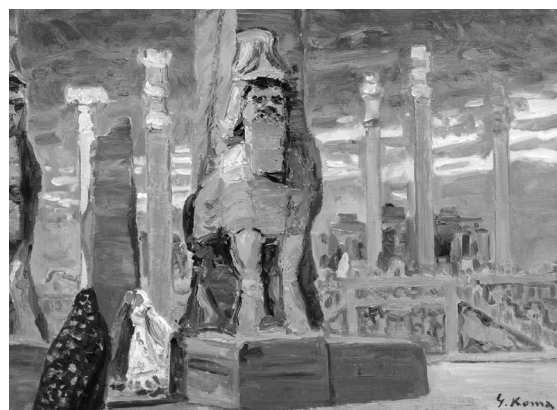
No.43 サマルカンド裏通り



No.46 無題



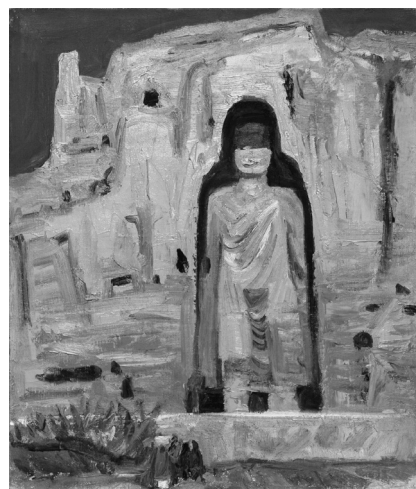
No.48 カブールの女達



No.51 クセルクセスの門



No.66 火焰山



No.68 バミヤン石仏

横浜ユーラシア文化館 第9号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 9

2021年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通 12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 株式会社佐藤印刷所

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Sato Printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2021

ISSN 2187-7734